

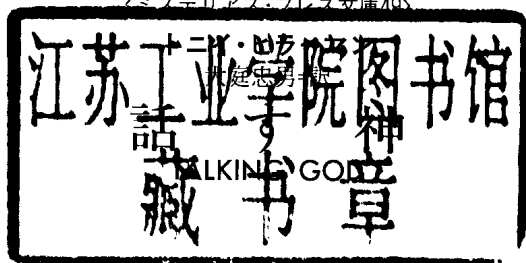
Tony Hillerman
トニー・ヒラーマン
大庭忠男＝訳

話す神

Talking God



〈ミステリアス・プレス文庫49〉



3163

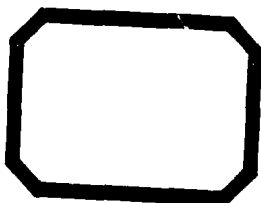


THE MYSTERIOUS PRESS
Tokyo



THE MYSTERIOUS PRESS

Tokyo · New York · London



Mysterious Press and the Mysterious Press logo
are trademarks of Warner Books, Inc., New York, NY,
used by Hayakawa Publishing, Inc., Tokyo.

神 話

1992年4月20日初版印刷 1992年4月30日初版発行

著者 トニイ・ヒラーマン

訳者 ^{おおぼただお}大庭忠男

発行者 早川 浩

発行所 The Mysterious Press, Tokyo

発売元 株式会社早川書房

郵便番号 101 東京都千代田区神田多町2-2

電話 東京 (03) 3252-3111 (大代表)

振替 東京・6-47799

印刷 株式会社享有堂印刷所 製本 株式会社川島製本所

Printed and bound in Japan

ISBN4-15-100049-6 C0197

〈乱丁本・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします〉

〈定価はカバーに表示してあります〉

TALKING GOD

by

Tony Hillerman

Copyright © 1989 by

Tony Hillerman

Translated by

Tadao Oba

First published 1992 in Japan by

HAYAKAWA PUBLISHING, INC.

This book is published in Japan by

arrangement with CURTIS BROWN LTD.

through TUTTLE-MORI AGENCY, INC., TOKYO.

この本を、わたしが〈話す神〉について考えるきっかけとなった
イエイビチャイの絵を描いたツァイル・スクールのデルバート・ケ
ディルティ、テリー・テラー、デイビッド・チャーリー、ドナルド
・ツォシーとその他の子供たちに。

また、未来の世代のためにハジイネイ・ディネタの遺跡と象形文
字を保存するために戦っているウイル・ツォシー、ツォシー・ツイ
ニジニ、ナヴァホ族会議員メルビン・ビッグサムその他の人びと
に捧げる。

著者の質問に寛容をもって接し、大博物館の展示場の内情について多少の洞察をあたえてくださったスミソニアン国立自然史博物館のキャロライン・L・ローズ、マーティン・パーク、ドン・オートナー、ジョー・アリン・アーシャンボアの各氏と、その他の主事、学芸員、そして親切な一般職員に感謝する。

この小説の登場人物は、バーナード・セント・ジャーメインとアーニー・ビューラウ以外は、すべてわたしの想像力によって生み出されたものである。肩書きの一部には実在のものもあるが、その役職についているのは架空の人物である。

話
す
神

登場人物

ジョー・リープホーン	ナヴァホ族警察警部補
エマ	リープホーンの亡き妻
ジム・チー	ナヴァホ族警察巡査
ジャネット・ピート	弁護士
ジェイ・ケネディ	F B I 捜査官
カウボーイ・ダッシー	保安官補
アグネス・ツォシー	〈苦い水〉氏族の長老
ヘンリー・ハイホーク	博物館学芸員
キャロリン・ハートマン博士	ハイホークの上司
ルドルフォ・ゴメス	〈悪い手〉
リロイ・フレック	殺し屋
ロドニー警部	リープホーンの旧友

受付兼秘書の部屋から自分の部屋にはいりかけたところに、キャサリン・モリス・ペリーは机の上の箱に気づいた。それは大きくて——幅が三フィートぐらい、高さも同じくらいあった。上に書かれている文字から、もとはゼネラル・エレクトリックの電子レンジがはいっていた箱であることがわかった。細長い茶色のテープをはってある。粗末な箱で、キャサリン・ペリーのしやれたオフィスの淡くやわらかな色調や、趣味のいい調度品とそぐわなかった。

「週末はいかがでした？」マーキーが言った。

キャサリン・モリス・ペリーは掛け釘にレインコートをかけ、その上に雨天用の帽子をのせ、靴から透明のビニール・カバーをはずして言った。「おはよう、マーキー」

「バーモントはどうでしたの？」マーキーはたずねた。「やっぱり雨ですか？」

「これ、どこから来たの？」キャサリンは箱を指さしながら言った。

「フェデラル・エクスプレス宅配便です」マーキーは言った。「あたしがサインしました」

「なにか来ることになってたかしら？」

「なにもうかがっていません。バーモントはどうでしたの？」

「雨降りよ」キャサリンは言った。バーモントの話はしたくなかった。いや、それ以外でも、オフィスの外での生活のことはマーキー・ベイリーとは話したくなかった。マーキーと話合いたいと思ったのは趣味のこと——あるいは趣味の欠如のことだった。彼女の古めかしい机の上に、茶色のうすぎたない大きな箱を置くのがそのいい例だった。ぶかっこうで、うすぎたない箱は場ちがいだった。ミセス・ベイリーがこのオフィスに場ちがいであるように。しかし、彼女をこのオフィスから追い出すことはほとんど不可能だった。公務員の身分保障法のもとは、ずいぶんと厄介な問題になるにちがいない。法律家であるミセス・ペリーの専門は人事ではなかったが、自然史博物館でもめごとをひき起こしてばかりいる学芸員のヘンリー・ハイホークを追い払おうとしたころみから、あることを学んだ。あれは大失敗だった。

「お電話がありました」マーキーは言った。「チリ大使館の文化担当官からです。面会のお約束がほしいと言っていました」

「あとにして」キャサリン・モリス・ペリーは言った。「あとで電話するわ」どんな問題かは見当がついた。またインディアンの寄贈品のことだ。なんとか將軍が古い遺物を返してほしいと言っていた。その遺物は自分の曾祖父がヘユナイテッド・フルーツの幹部に貸しただけのものであって、あの男にはスミソニアン自然史博物館に寄付する権利はない、あれはチリの国宝であるから返還してもらわなければならぬ、というのだった。彼女の記憶ではインカの遺物

だった。もちろん、金だった。宝石をちりばめた金の仮面で、將軍はもしそれを手にすることができたら、たぶん自分の宝物にすることだろう。文献を調べたり、國際法を研究したり、自分の要求が彼女に大変な仕事をもたらすことを將軍は知らないのだ。

箱はでんとして机のスペースを占めていた。宛名は「博物館スポークスパーソン」となっていた。キャサリン・モリス・ペリーは「スポークスパーソン」と呼ばれることを好まなかった。そう呼ばれるようになったのはたぶん、彼女が博物館の方針について《ワシントン・ポスト》に出した声明が原因だった。それは偶然の結果といってもよかった。記者の電話が彼女にまわされたのは、広報部のだれかが病気で欠勤し、もうひとりも机を離れていて、電話を受けた者が弁護士にまかせたほうがよいだろうと判断したためだった。これもまたヘンリー・ハイホークに關係のあることだった——すくなくとも間接的には。彼がひき起こしている原住民の遺骨返還さわぎと關係があつた。《ワシントン・ポスト》は誤つて彼女を「スポークスパーソン」と呼び、彼女の言葉を引用した。博物館の理事会の意見として引用すべきなのに。遺骨についての方針は理事会の正式の方針だった。穩当な方針でもあつた。

箱に貼られたフェデラル・エクスプレスの宛名は肩書きの誤りをのぞけば止しかった。彼女は内務省から出向した「広報部、臨時次席顧問」だった。彼女は椅子にかけて郵便物にざっと目を通した。重要なものはなかった。ナショナル・バレー・ギルドからの資金集め公演への招待状。アメリカ市民自由同盟からの手紙。博物館營繕部長からの、人事面の苦情の処理は法律どおりにはいかなない理由を説明したメモ。来月開かれる展覽会に余所から借りうけて展示する

陳列品の保険に関する手紙と、見おぼえない外部の私人からと思われる三通の手紙。

キャサリン・モリス・ペリーはそれらの封筒を開封せずに脇に押しやり、箱を見て顔をしかめた。それから机の引き出しをあけてペーパーナイフを取り出した。そしてブザーでミセス・ベイリーを呼んだ。

「はい」

「ミセス・ベイリー、こういう箱が届いたら、ここへ持ってきてあたしの机の上に置かないでね。あけて中身を出しといてちょうだい」

「わかりました」ミセス・ベイリーは言った。「いまあけましょう。重たいんですよ」彼女はちよっと言葉を切った。「ミセス・パターソンはいつも郵便物はみんな机の上におくようにとおっしゃいました」

「あたしがあけるわ」キャサリンは言った。「これから先のことを言ったのよ。それからミセス・パターソンは休暇中です。いまはこの責任者じゃないわ」

「わかりました。電話の伝言にお気づきになりました？ 二つありましたけど。机の上にありますません？」

「ないわ」キャサリンは言った。たぶん箱の下になっているのだろう。

「ドクター・ヒーバートからお電話で、骨の問題の処理のことでおめでとうを言いたいとおっしゃっていました。《ワシントン・ポスト》であなたがお話になったことです」

キャサリン・ペリーはペーパーナイフでテープをはがした。この箱はたぶん、《ワシントン

・ポスト」の記事の結果なのだろう。博物館のことがニュースになるたびに、数多くの老婦人たちが子孫に残すべき屋根裏の骨董品を思い出すのだ。キャサリン・ペリーの名前が新聞に出たので老婦人の一人が彼女あてにこのがらくたを送ってきたのだろう。いったいなにかしら？ パターの攪拌器かくはんだろうか？ 家族のアルバムだろうか？

「もう一つは人類学課のかたです。メモに名前を書いておきました。お電話をいただきたいと言っていました。骨の返還を求めているインディアンのことだそうです」

「わかったわ」キャサリンは箱のふたをあけた。いちばん上に《ワシントン・ポスト》がはいっていた。二つに折って彼女の記事が見えるようになっていた。その一部が黒い円でかまれていた。

古い人骨論争で

博物館妥協の意向を示す

その見出しはキャサリンをいらだたせた。妥協の意向などは示していなかった。彼女は博物館の方針をのべただけなのだ。もしインディアンインディアンの部族が先祖の骨を返してもらいたかったら、問題の骨が本当にその部族の墓地から掘り出されたものであることを示す十分な証拠を提出しなければならぬ。そういう主張全体がバカげた、恥ずべきものだった。実をいえば、ハイホークという人間とやりとりすること自体が恥ずべきことだった。ハイホークと彼のパホ団と交

渉するのが問題だ。彼は博物館の下っぱ職員で、パホ団は知られているかぎりでは、彼の想像の中にだけ存在する組織だ。そしてトラブルを引き起こすだけのものだ。彼女は円にかこまれた箇所を見た。

「博物館の弁護士で、この問題についてのスポークスパーソンであるミセス・キャサリン・ペリーは、パホ団が要求する博物館の一万八千以上におよぶアメリカ原住民の骨全部の返還は博物館の目的にかんがみてまったく不可能」なことであると語った。

博物館は公衆のための展覧場であると同時に研究機関であり、博物館の古い人骨の蒐集は人類学に関する知識の潜在的に重要な源であると彼女は語った。彼女によれば、博物館は人骨から石膏の複製をつくって、骨をもとの場所に再埋葬すべしというハイホーク氏の提案は、研究の必要と、公衆は単なる複製ではなく本物を見る権利があるという二つの理由から「非实际的なものであるという」

「本物を見る権利」という箇所にはアンダーラインをしてあった。キャサリン・モリス・ペリーは批判を感じて眉をひそめた。彼女は新聞を取り上げた。その下には、茶色の包み紙の上に封筒がのっていた。彼女の名前がきちんとした字で書かれている。彼女は封筒をあけ、タイプされた一枚の紙を取り出した。そして、それを読みながら、箱の中身と封筒とをへだてていた包み紙を片手ではがした。

博物館へ骨を見にきた公衆は本物を見る権利があるという理由で、あなたはわれわれの祖先の骨を埋葬しようとしなさい。そこで祖先の本物の骸骨を二分分お送りします。わたしは聖ルカ監督教会の裏の森の共同墓地へ行きました。本当の人類学的方法を用いて本物のアングロ系白人の埋葬場を捜し出し――

ミセス・モリス・ペリーの指は包み紙の下にさしこまれた。泥と、スベスベした冷たい表面が感じられた。

「ミセス・ベイリー！」彼女は言った。「ミセス・ベイリー！」しかし彼女の目は手紙の末尾へ動いた。そこには「苦い水氏族のヘンリー・ハイホーク」と署名してあった。

「なんででしょう？」ミセス・ベイリーは大声で訊いた。「なんでですか？」

――それらが完全に本物であることを確かめられるように、あなたがみずから確認することが出来る二体を選びました。この二つの骸骨を本物の陳列品として受け入れ、わたしの祖先の二つの骸骨を解放して母なる大地の彼らの本来の場所へ返還してくださるようお願いいたします。この二つの本物の骸骨の名前は――

ミセス・ベイリーはいまは彼女のそばに来ていた。「どうかしたんですか？」ミセス・ベイリーは言った。「骨じゃありませんか。泥だらけだわ」